

地域で自分らしく生きるために

～大山町の在宅医療・在宅ケアのこれから～

と き **3月23日(月)** 午後7時30分～9時30分

と ころ **保健福祉センターなわ 多目的ホール**

講 師 **米子保健所長 大城陽子 医師**

内 容 **①講演「これからの在宅医療・在宅ケア」**

②シンポジウム

コーディネーター：**藤井政雄記念病院 副院長 足立誠司 医師**

シンポジスト：**(現場の立場) 大山町社会福祉協議会**

ケアマネージャー 前田 好子 氏

(家族の立場) 大山町佐摩 徳永 英敏 氏

(医師の立場) 大山口診療所長 久野 宣年 氏

(広域の立場) 米子保健所長 大城 陽子 氏

(行政の立場) 大山町長 山口 隆之 氏

◆問い合わせ先 **福祉保健課保健師 ☎ 0859-54-5207**

Health

診療所 待合室

在宅医療と健康長寿



大山口診療所所長
久野 宣年

町(地元)に帰ってその老医師に看取られることが多かったようです。

健康寿命は何によって決まるのでしょうか。働く老人が多いのは長野県もそうですが、健康寿命が長く、いわゆるPPK(ピンピンコロリ)(※)となる人が多いのです。高齢者にもっと活躍してもらいましょう。今の高齢者が若い時、子供の頃はすぐかかれる診療所や病院も少なく、自分で自分の健康を管理してきました。子育てや介護の知恵もあります。まさに「老人は宝」です。70歳を過ぎたら、病気を探しはやめて、自分の宝探しをして、社会に役立てて欲しいと思います。

夕張市では、新しい医師の在宅医療をすすめる活動で、医療費が4千万円も少なくなったそうです。その医師のモットーは「老人は宝である。」ということですが、老人が元気で働いていれば、老人の医療費が少なくて済むだけでなく、町の収入が増え、町に活気があふれてきます。

10年くらい前のことですが、韓国から、鳥取県に健康寿命が大変長く老人医療費の少ない町があるらしいので、様子を見せてほしいとの依頼がありました。県の担当の方が驚いて調べてみると、鳥取市からずっと山奥の町でした。その町には高齢の医師が一人しかいなくて、大きい病院もありません。しかし、老人は元気で山村でよく体を使い働いていました。病気がやけがで鳥取市の病院に入院しても、治療できないと分かると、

※PPK(ピンピンコロリ)とは、高齢者の「元気に生きて死ぬときはコロリと死にたい」という願望を表した言葉で、長野県内で中高年の健康づくりのキャッチフレーズとして使われたのが始まりです。